WASON
HQ
1104
J74+

Sept. 10
1885
no. 4

驛遞局認可

明治十八年九月十日發行

女學雜誌

第四號

東京萬春堂

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

五常の歌（禮）竹の屋も松の心も人としてうへしたをしる人ぞ人なる

●女學雜誌第四號目次

女學校の必要●雜報數十件●女子のたしなみ●梅香女史の傳附圖●閑亭梅、女〻の心得、萬の事はたのむべからず、文ょ書く詞●女中の四藝、給仕の次第、縫ひ方いろ〳〵●娶の心得、ウィリヤム女の貞節、待賢門院堀川、大貳三位、小式部內侍、婦人東髮會記事、婦人束髮の雛形幷說明書、女ょ五ッ文字、ふとんのこと、女中の帶●いろねの答、白無垢の答、おの字の問、齒を染むる問、風呂敷の問●諸廣告數件

九月十日

明治十八年間 女學雜誌發兌日表

月	發兌日	發兌日
七月	廿日	
八月	十日	二十五日
九月	十日	二十五日
十月	十日	二十五日
十一月	十日	二十五日
十二月	十日	二十五日

廣告正價表

一行一回揭出	但廿三字詰	前金五錢
同 三回以上	同	同一割引
同 六回以上	同	同二割引

報告

當分每月二回の發行ト定むと雖とも事業の整頓するに隨ひ漸次回數を增加して每週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵稅共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但たし不得已者は限り郵錢切手一割增ょて申受候●爲替は東京芝區新橋郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊堂ょ御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細ょ御記入可被下候

女學雜誌代價郵稅表

一冊	正價四錢	郵稅一錢	合計 現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計 前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計 前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計 前金壹圓卅錢

但し每號拾冊以上づゝ取纏めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第四號　（明治十八年九月十日）

●女學校の必要

我國文明の風は此頃に至りてやう〳〵其の方向を轉じ古來未だなき眞正の開化を容るゝの地を作る有樣に立ち至らんとするは尤も喜ぶ可きことなり其を何ぞと云ふは彼の婦女の品位を高めんとする議論の太甚しく行はるゝ樣となれりしと卽ち是れなり凡そ吾等の母たり吾等の妻たり吾等の姊たり妹たる者の殆んど人間以下に一等を下りし者の如く取扱はるゝを恬として顧みず或は之を器械視し或は之を假宿の如く覺えてありし時に何ぞて眞正の文明の行はるべき理あらん哉婦人の地位如何を見て其國文明の尺度を計るとはまの道理あるが故にして玆に足らざるは如何斗りに外國の服飾を爲し得たりとも尙は半開野蠻の有樣に止れる者と見做さゞる可らず

然るに近來如此く婦人改良の議論盛んとなりて男女同等なるべきの理これ程に明となりたるは是れ我國の文明のにはかに一等を進みたる證據にして特には婦女諸君の爲に大賀すべき譯なるべし吾人は二三年來の微意を達し少かなても此の輿論を惹起するに効ありしことを喜ばしく思ふなり然れども今まゝ之を賀し之を喜ぶの時亦た一の忘る可らざることあり卽ち斯く議論の盛んとなれりしとも其の議論の實際に行はれしても如何程ありやと問ふと是れなり若し實際に行はれざらん議論ならば何程の力もあるまじき者にして吾等の賀喜すべき所にあらざる所と考ふが爲め也

○實際果して如何。婦人慈善會の行はれし耳、婦人財嚢の行はれし耳、婦人踏舞會の盛んなる耳、婦人束髮會の流行せんとする耳其他何物かある曰あるなし右等の會と仕事とは決して無用に非ず婦人亦た社會に出でゝ働くべく婦人決して人の爲に飾る者に非ずとの理を世に公にする爲めには固より其の効能著明

なるべしと云へども斯る事々ハ抑も末なり此等の手續に由りて我國婦女の地位を高めんとするは例へば礎を置へず柱を組まずして先づ建具を飾り疊を配するの愚あるに均し吾人ハ先づ婦女敎育の方法の確立するに非ざれバ決して后來の爲めに安心すべきよ非ず其他の改良法行はるゝとも其法を美にし其法を永續すると能ハざるべしと思ふあり

ワシントンを造りし所は何處ぞや學校なりナポレオンを養ひし所ろハ何處ぞや學校なり孔子も學び孟子も習らひ皆な學校の敎育養成を得て初て學聖英雄とハなれりしなり然るを今ま婦女の爲に具ハれる完全の學校なくして之を上等の地位に進むべき道路なしと云ハゞ如何よしてか婦女社會亦た有爲の人を偶生せしめ得べき筈に后來に有爲の人を生じ得ざる耳ならず現今に於て婦女を優待すべき方法を實行するに妨ありて美法も尚ほ行ハれざる也昔しフヒヂー島の蠻民を英國へ連れ歸りて之に英の食を食ませ英の衣を衣せたり然れどもダルヰンが之を其の故島に送りて后ち暫らくにして相見たる時ハ純然として復た舊の蠻民となりしと云へり抑も英の衣英の食もと不便不利なるに非ずたゞ未だ英の敎育を受けざる者に對してハ尚ほ其便利を悟らしむる能ハざるなり彼卑屈人の權利を尊とまず野人の禮節をものうしと思ふ皆な此理にして今ま吾國の婦人へ突然として優待の贈り物を送るともそハ反て彼等の不便とし不利として或は之を嫌ひ或は之を害用するの損あるに止るべきと甚だ明けし此故に先づ之を敎育して后に之よ英の衣食を與へ權利禮節を守らしむべしとハ云ふ也

此に至りてハ誰れも女學校なるものゝ入要なるを悟るべく亦た此上の議論ハ無用なるべし然れども吾人が茲よ女學校を必要とすと新らしく云を聞けバ人は即ち或ハ疑ひて問ハん然らバ我國にて現今女學校な

しと思ふや如何んと吾人はたゞ云ふ婦女教育の教制そでに立ちて小學校中夙より之に具へれり世間亦た女學校の數少きに非ず往々にして之れ有りたゞ云ふ未だ完全の女學校なしと

小學教制の事は暫く云はず其他に於て今ま果して官立の女大中學校ありや亦た私立女學校中よく此頃の輿論に相應せる教制の所ありや吾人は殊に悲しむ今ま尚は此如きなきを或は從來の漢學教育に偏し或は歐米の洋學教育に偏し未だ日本婦人を養成すべき完全の女學校なきの歎太甚だ切なり

抑も漢學教育の女學校は世に益なきのみならず是よりの進歩を害し文明の妨となるものなれば其の一日も早く滅絶せんことを希ひ亦た歐米の洋學教育を主とせる女學校は此れより少しく其の方針を更められんことを望む也思ふに如此き女學校なりとて必しも日本婦人なる者を養成するに念なきに非ず其欲する所ろは或は與に之れなりやを知らずと云へども其校を主る者の今ま大抵は歐米人にしてもと歐米人の發起に成れる所の女校なるが故に勢此の弊に偏向せざる可らざる也要此れよりはよく日本の景勢を思ひて甘く折衷の學制を行はれんことを希ふのみ然れども吾人は彼の慈善會束髮會等に熱心なる人々の亦たよく其本を見て茲に協同奮力し以て完全なる女學校を設立し日本婦人の教育を日本人民の手に由りて支配し以て眞正の婦女改良を行はれんことを切望して止まざる也

●明治女學校　吾人の意見は本号の社説に記せる如くなるが今ま聞く所ろに由れば實に喜ぶべき好報あり曩に米國へ十二年間流學して神學醫學を修め特に教育の事に熱心なりとの聞えある木村熊二氏及び眞理一班の著述に有名なる植村正久氏及其他の發起に由りて新に明治女學校なる者を興し今月中旬より開校して日本婦人養成の事を執り盛んに有爲の人を生

せんことを勉めらるゝと云へり社友某も亦た右の二人に縁故ありて該校の設立には多少の盡力と贊成とを爲せる者に付き向后も此校の報道も勿論校女生の文詩等を時々本誌上に掲錄することとすべしと申越せり吾人は卑意のますく同意者を得る實際に數多きことを知り欣喜に堪へず世間の婦娘に公告して此校のいよく隆盛となるべき様亦た他の諸女校の均しく進歩せんことを希ふと云ふ

●束髪に決定す　東京女子師範學校の教員は今回の婦人束髪會を贊成し生徒一同へ衛生及び便利經濟の旨きを諭されしに生徒も之を贊成し何れも束髪に決定し追々實行する筈なりとぞ

●女學校の洋服　頃ろ東京女子師範學校は教員幷に生徒まで洋服を着する者多くなりゆきたれど地方にて遙かに秋田女子師範學校のみ之に倣へりと聞きしが昨今聞く所に依れば宇都宮女子師範學校にても教員一同洋服を着することゝなりし由

●女學校の定額　四谷仲町へ設立の貴族女學校は教師職員の月給其他の費額を一ヶ年金一万圓と豫定されたるよしなり

●風俗の改良　近來我邦の貴婦人方も衣食又は髪の結び様を始め行儀作法等を洋風に模倣し追々改良を計らるゝに贊成する人日ごとに多きよし然るに耳飾りの無きは猶欠點なりとて或る貴顯には深く遺憾とせられ他の一二の貴顯に謀られしに大贊成にて併し夫れも幼年の時より裝飾せしめずばなるまじ去れば御令閨には用なきことなれど幼年の令嬢方には今の内に着けさせられたし夫には如何なるものがよからむなど昨今御相談中の由に聞けり（本年八月廿七日朝野新聞）

●赴任せらる　岡千仭先生の長女都子（十九）も先頃東京女子師範學校の全科を卒業せしに付き今回福

島女子師範學校の教員を命ぜられ去る廿七日赴任せらる

●音樂の改良　音樂取調所に於てハ既に數名の卒業生を出したれども未ダ音樂上の理學士を養成せざるに付き近々其等の運びをさるゝとか聞けり又或る人の話に同調所ハ從來用うる所の俗曲中にて其曲の佳なるも其の歌詞の猥褻に流れ或ハ淫行を導く等の嫌ありて衆人稠座の中にて歌ひ得ざるものハ矯正せらるゝ爲めにて且つ旋法に意を用ひられ一部ハ取るべきも一部ハ取るべからざるものハ夫々その一部を改造さるゝことなれば敢て新古を撰んで取捨するものにあらざるとのことなり

●婦人乘馬會　貴顯の夫人ハ追々外國風の交際に立入ることにありしを以て既に舞踏會なるものを設ケ宴席夜會に出る時の爲め舞踏を練習されし處頃ろ何れも熟達せしを以て此上ハ馬術を訓諫し外國婦人の如く自在に乘馬し得ざれバ不都合なりと某貴顯が發意にて近々婦人乘馬會といふを設け乘ることをも練習せしめんと目下計畫中の由に聞く

●私立大坂女學校　同校は創立以來日増に盛大となり目下校則等を改正して一層女子の教育を擴張せんと計畫中のよし嗟呼東都に明治女學校の起るあり西地に私立大坂女學校のあるあり民間追〳〵有志の人輩出して婦女の改良を計らるゝハ我國の爲め婦女の爲め賀すべし欣ぶべし今同校の概況を報じ越されたれば左に掲ぐ

教員　小谷野千代、波多野まさ、助教員　手島三保、大倉章、杉本久、臼杵宗休、生徒總數百拾有名内寄宿拾七名余は皆な通學

寄宿生は九州中國大和河內等の人も之有りとのことなり又た去る七月中の全科卒業生ハ大坂。藤木いく。大坂。神内壽の二名なりし由

●離婚條例　曩に其節に於て結婚條例を制定に可じ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

との議ありて種々評議せられしが某貴顕の異論にて全く廢案に歸せし處ろ此程又或る貴顕の右に付一の持論を提出し結婚離婚ハ社會の一大要件にして忽せにす可らざるものあり故に泰西開明國にてハ此法の設けあらざるハなし去れバ我邦にても是非同法を設けざる可らずと雖ども結婚方法の如きハ古來の習慣に基くものゆゑ之を改正するの必要を見ず只だ離婚の如きに至りてハ古來の習慣を履行する者にあらず一己人の氣隨に因るものゆゑ或ハ道徳を犯す者あり或ハ法律を犯す者あり其不都合實に云ふべからざるものあれバ之を確定するハ我邦目下の要件なり因て今佛國の離婚法に倣ひ離婚條例なるものを制定せば自然右等の弊害を防遏すべし云々と辨明されし由本年八月廿六日の朝野新聞に見ゆ

●名譽賞狀を受く　華族九鬼隆義子の令孃好子(十六年)ハ豫て海外留學を思ひ立ち昨年九月九鬼公使が米國へ赴任の際好機なりとて同君に隨ひ同國へ渡航せられ某學校へ入校して頻りに勉強し居られしが此ほど同校の試驗に於て名譽賞狀を受けられたるよし

●清帝の婚儀　清帝ハ今年十五歳になり給ひしかば既に其誕生節を行はれしが今より三年を經て乃ち十八歳にならせ給へバ皇后妃嬪を迎へせらるべき定めなり大清帝の婚禮法ハ明朝の奉じたる法規と畧ぼ均しく清帝の皇后妃嬪ハ皆滿州人の位階一等より五等までの者の中より撰まるゝなり若し婦人の方よりして帝を慕ふときハ假令其父の位階五等の者と雖ども帝之を延て皇后と爲すなり位階卑しき者の女子も二十歳を超ゆるまでハ合卺の禮を行ふことを得ず其の年齡に達するまでハ帝の裁理に任ず支那人ハ皇后又ハ妃嬪たるを得ず只蒙古人ハ間々宮女となることありと本年九月一日の報知新聞に見えたり

○女子のたしなみ

織田ふく女史

女子ハ男子と異なりて言葉、服飾、起居等の至つて小事までに心づけねバ成らぬものにて男より一層心配多きものなり其うち衣服ハ借着をなしても長短身にかなへバ人之に心づかず故に今日ハ堅氣の娘風となし明日ハ藝妓の姿となること最易し起居ハ夫々の法あるもまさか人中にて足もて障子を開る者もなく何程賤しき者とて他へ行たるとき兩肌を脫ぐ樣の無作法ハ致すまじ左れバ是も先々難きに非ずとして一に俄に改めがたきものハ言葉づかひなり仮令何程上品の姿をなすとも「イヤデアリンス」「ナンザマス」抔の言葉をつかはバ誰かハ此人を娘と思ふや必ず娼妓たる事ハ云はでも知れるものなるべし又華族方の姫君めかすとも「氣障な」等の言葉づかひせバ人により爪彈きして遠ざくべし妾さきに東北の遠き國に行き土地の或る者の娘を雇ひ置きたるに此娘常に穩順なして讀み書き其他も年にしてハよく出來容貌も人並にて愛敬ありき或日東京より用ありて來られし人あり其下婢を見て產れを問ひ族籍など聞きて我長男の嫁に欲しきものなり士族なれバ至極宜しと云はれしハ戲れにてハ無き樣なりしが頓て近くへ招き年齡其他を問はれしに「拙者ハ十六」「江戸サアいやナ好ましからねエ」「平民の野郎めと」等の語を發したるにより折角の話しも立消ゑ是も土產の一ツなるべしと僅の言葉に緣も整はざりし同所士族の娘妻等ハ自らを拙者といひ人を卑むるに平民野郎在鄉太郎など云ひしを常とすれバ心になくとも口に癖づきて云しなるべし此他口のきゝ方にて人に輕蔑さるゝ事ハ屢々あり堅氣の町家にハ今に「氣障ナ」「オヤ否だ」「よしておくれ」の類ハ下女にも云はせぬ向ありとハ左もあるべき事なり又或方にて下婢を雇ひたるに夜分「お休なさい」といふを主人の「御機嫌よく」といふのが先雇主

と雇人の通例なりと教へられしに下婢は何分聲を發して御機嫌よくが云へど此事にて兩三度主人より叱られしとて斯出したる者ありとか故に女子の第一に心がくべきは言葉づかひ妾も成るべく心懸るつもりなれども折々シバナのシキダシにシタキレがアルカラ夫で拭んだ此「んだ」杯にては毎度毋に叱らるゝ覺あるにより御心づけ申すことしかり

○梅香女史の傳　　月の舍主人　錄

第三

乱れて咲ける女郎花
染らで淸よき運びあ

日本一の大都會四方の人々集ひ來てあづまの京と榮ゆ行く万代橋の頭にて坂をのるけく駿ヶ台前に對して一帶の水を茗溪の谷を流る風景閑雅の一方に巍峨たる高館后ろに聳ゆ鬱乎たる常盤木前に列り數百の生徒を養成して五ゐ足らぬ幼子をも師範ゐ教ゆる學校あり時は冬枯の中あれど天も小春ののどけさに運

動時間を幸ひと庭に立ち出で彼方此方を三人四人のつれ立ちて何事やらん語り合あり（澤山）田中君今日はモーモーいやな算術で實に頭腦を勞らしたよ固より勘定よ達したいのが本望でないから算術などと少こしも心が有りませんチー（田中）サウサチー然し君と此間だ活潑な才子と多く商人に爲て居るから卒業の后とソンナ人と協力して一事業を興し度とか言つたッヤーありませんか然なれば算術あんぞと無論上手の達人でなくチャーいきませんでせう（澤山）何サ代數ダノ幾何あどと面白いから聞分學でもヨシ又た幾分か他日の爲め腦力を練るに能いけれど算術なんぞは異平サ何ニ勘定なんぞは他日志を得たる時よ番頭にさせる積ダから實に勉强する心がありませんよ（田中）甘く云ヒ玉へ（古木）時に此間の大學卒業生中よはドウデス少し有爲なのが有りましたか（澤山）今度のは余り聞えませんよ然し今から二三年立たナク

ツナヤア今度の卒業生の孰れが宜イと云ふ事ハ分りますまい學校中で有名なのハホンの點數的ニ勉強する小心者でせうから(田中)澤山君ソンナニ知らぬ風を爲玉ふな例の才子ハ今度卒業したシヤアありませんウ(澤山)ヨシ玉へ(松本)何方でもアノー澤山さんの御氣に入ッタので有ますのですのツリヤア定て非常の才子で御座いませうチー(田中)チ丶一寸待ち玉へ例の梅香先生が此方へ來るよアノ先生が來ると實に窮屈でありませんよ(澤山)ナゼそんなに恐れ玉ふ誰れも入校の初はアンナものさ僕等イヤ妾等ハ之を導きて當世風にする義務がありますせ(松本)チヨシなさい彼の方ハ實に非常な苦勞を爲すつたサウデス素とハ鹿兒島で御歷々でしたさうでもが父の行末知れず母ハ他人の世話に爲つて居られしやるのを御親類の引取て入校をさせなすつたさうです他日婦女社會の改革者たる人も阿の方でしようと存じますよ

(古木)サウサ隨分凜々しい性質で特に勉強家でもから出來マシヨウよ(田中)先づ容姿が好いから天然でも妾等の及ぶ所に非ぞサ(澤山)ナニ教育を受ける時ニ天然が何んでせうモウ先生も年は十八九位でしようが余ッ程勉強せんにやと云ひ乍ら目を遠近にして段々に聲を低くする此時梅もやうやく其邊に來りて澤山さん昨日も眞に有難ウ御座いました御影で丁度好いのを見當りました(澤山)さうでしたの何程でした(梅)へー一圓半に少し出ましたよ(田中)何んですゥ(梅)ナニ敎科書です。古木さん松本さん御機嫌宜しく(古木)結構な天氣ですね(松本)アナタ御勉強デスの今日御歸に御寄り遊バせ先達て私の母にもあなたの事を申しましたら是ッ非一度御目に掛り度と申して居りましたのら(梅)ソレハ御信切な有難う御座いまもり何れ今晩は叔父に申しまして御目に掛りに上りましよう(澤山)青山梅の名氏さん科業はどうです隨分

御面倒でせう(青山)左樣ですまだ慣れませぬから實に何事も容易にハ出來ませんが然し大きに時候も段々と勉强によくなりました(田中)マー入校前后の時でハ其の頃が一番正直に勉强するのですか段々甘くなりまして遊で居ても試驗にハ上れる樣にありますよ(古木)田中さん又秘傳の御敎授ですか(澤山)ア、モー時でしよう又た〳〵いやあ暗誦ですかと云ひ乍ら田中古木もろともに足のあゆみもせハしくしく講堂の方へ歸り行く松本は梅もスともハ優々と後より

伴ひ歩み乍ら(松本)いろ〳〵アナタに承はり度ともありますし又た私の樣な者でも多少は后來の事も考へて居りますから御説を聞た上でどうか御一處に御勉強なすつて下さいまし此程から御出なさつたのですが私はあなたより外に友立はないと思ふて居りますから(梅)眞に有難う御座います私もさすが日本一の女學校丈けと思ひましたは家屋の結構抔で實に失望しましたとも多く御座いますがアナタの御親切ニ仰シヤツテ被下のでやう〳〵勉強の心も減じませんですアナタは母と御二人ぎりですか(松本)ハイ左樣です段々の御物語が御座いますがと云ふ間早くも講堂の入口に來りぬ

本章は固と學校の女生徒中に行はるゝ當世の風体を有の儘に寫せしまでにて其外に深き意あるにも非ずたゞ青山梅が其叔父の周旋に由りて去る九月より此の校に入りて此れより好運の基をひらく其緒を示すに止るのみと知れかし

○閑亭梅　　在東京　林甕臣

むつきむかりものへまかりけるに。ふとふみたがへて。あらぬ道のかた山ぎしをたどり行に木だちものふりてうとましきまでいとすごげに荒またりたる家の庭あり。梅の花のまろう盛に咲みだれたるに。蕭さへになららぬをみすぐしがたくてしバし立どまりて垣のくづれより見られたるに池のそめるらうなど。ゆがみよろぼひたるかたへの西れもてに賤しからぬ女のけはひとあてにらうたげなるが。春の日ののどやかなる空のけしきを見いだして。よりふしたり。かをりくる袖の追風さへたゞならねバ。すゞろに心ときめきせられて。やゝらをれ殘りたるすゐがいのもとにかくれたちて。とかうながめやりうかゞひつるに。鶯のおとただしう人くひとくとそれぞろのくつるも。心のれにゝ胸つぶれて。なまいしたならま

はゆしや。さなづけそ宿のあるじに鶯よたゞ花の香によれる計ぞ

○女文の心得

女の文はひらがなにて其ことはりのよく聞ゆるやうに書くべし文言もやすらかにくどからぬやうに認むべしかりにも戀の文詞こび過たる詞耳なれぬ詞とやり詞遊女の云なれたる言葉などはわすれても書まじきことなり又た貴賤上下のわかちを分別して書べし貴人へ奉る文の文言は随分わきまへてやすらかに書べきをかるはづみに書なし下ざまへやる文はくどからぬやうにさつと認むべきを文句に無用のかざりを入てわれならずうやまひ過たるも見ぐるしき者なり其はとしゝを辨へんこと肝要なり又た貴人へ悪しき紙にて文をたゝむるは無禮なり格別よき紙を用うるとも率なり紙は大奉書を上として其次は杉原にてよし文をかき終り侍らば又た一遍よく〳〵よみかへして見て書きおとしたることあらば別の紙に其品を書き認め玉ふべし一月年始の文又た婚禮元服等一切祝ひの文類は墨の薄からぬ様筆のかれざるやうに認むべし文躰の墨繼をよく〳〵心得べし貴人の名を書くときは墨を繼で書くべし此外御祝言御元服御法躰御本服御快氣これらの類は墨を繼で薄からぬやうに書くべし又た御死去御病氣御煩ひなどの不祝儀事をかくときは墨をつがず上より書き下す薄墨にて書くべきあり婚禮の文になを〳〵書くは大に忌ことなり此外かへす〳〵かさね〳〵御かへり御もどり又々是等の詞をわすれても書くまじきなり

○萬の事はたのむべからず

萬の事はたのむべからず愚なる人はふかく物を頼むゆゑにうらみいかる事ありいきほひありとて頼むべからずときもの先はほろぶ財多しとてたのむべからず時の間に失ひやすし才ありとて頼むべからず孔子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

も時にあれど徳有とてたのむべからず顔回も不幸なりき君の寵をもたのむべからず誅をうくる事速なり奴しだゞへりとてたのむべからずそむきそしる事なり人の志をも頼むべからず必ず變ず約をもたのむべからず信ある事すくなし身をも人をもたのまざれば是なる時はよろこび非なる時はうらみず左右ひろければさはらず前後とをければ塞がらずせばき時はひしげくだく心を用る事少しきにしてきびしき時は物にさからひあらそひやぶるゆるくしてやはらかなる時は一毛も損せず人は天地の靈あり天地はかぎる所なし人の性なんぞことならん寛大にしてきはまらざる時は喜怒是にさはらずして物のためにわづらはず

（つれ〴〵草）

○文に書く詞　三重縣　種村箏女

山はこゆ　川は渡る　といひてこすといはず　●某の賀よといひて賀して賀すとはいはず　●ことぶきとはことほぎの轉語にて祝ひの言葉なれば人の命のことにいふはあしゝ　●功をいさほしと書くも誤りなりいさほと書くべしいさほしは功績にて功績せりといふべからず　●とみには早速にといふ意にして來ぬ出來ぬといふ詞には遣へども來た出來たといふには遣はず　●きこゆは敬ひ言葉なれば自らを稱してはいはず　●侍るは吾身につきていふ詞にて人の上にはいふことあし

○女中の四藝　西京　丸山すみ女

書筆　讀書の業は萬事の元也善惡の道理をきはめ女の道を知り古しへの事を覺へ忠孝貞節の勤め子を育つるの道を知るも皆な讀書の德なり殊に夫他國に在る時など文を遣しなどするは物かゝずし人をたのむときは內證の事共もれ聞へてあしき事ありもつぱら心がけて事かゝぬやうにあるべし

裁縫　女は夫に衣服をこしらへ着するものなれば

ちぬひのわざハ女子たるもの第一のつとめなり故に唐土文王の后ハみづから機織たちぬひをし玉ひしとなりたとひ富貴にして人にさせるとも自身にそのわざをしらざれバ吟味することならぬなりまして下〱の女子ハなを〱心がくべきわざなり

○詠歌　女ハ心詞のやさしきを第一とすなれバ歌道を心がくべき事なり歌ハ人の心をやハらげおそろしき猪もふすゐの床といへばやさしく聞ゆれバ歌に心さす人ハおのづから詞もやさしく心もけだかくなりて詠のことバおそいやしからづかなずかひともふつゝのあらねバ上つがたの女中ハとりわきて學びたまふべき事なり

○弾琴　糸竹の道ハ和を貴ぶなれば只なぐさみのミにあらざ和順あれバ家よく治るよつて神代のむかしも天の宇次女のみと弓を七張ならべて和琴を作り弾玉ふと也されバ佛神も感應あり夫の心をもよく和する

わざなれど是まさこゝろがけ玉ふべき事なり

○給仕の次第（前号のつゞき）

汁のかよひのこと　客汁をかゆるとき汁椀を盆にて取て下におきその汁椀のふたを取て討きせたつべし汁をかへて來るとき客の前にひざまづきふたをとりて盆のふちにうつむけおき差出すなり客汁椀をとらバ又盆を下におき盆にある汁椀のふたをとりて客のおきたるもとの所へなをしてたつなり

二の膳三の膳向ふ附の順ハ本せんの右へ二の膳左り三の膳向ふづけハ本せんの少し右のかたへすへおくべし菓子又ひきもの出る時本せんの向ふ左りのかたへすゆるなり

酌とりやうてうし持出で下にすハりてうしの口を左の方へむけて我前へおき客の盃とりさる時に立て客の前少し下座の方へひざまづき右の手にててうしのつる左の手にててうしのふたをおさへてつぐべし酒

つぎたらバまたもとの座へもどりて扣ゆべし肴をはさむと　右の手にてはしをとり左の手を添てはしをそろへさかなをはさみ差出すべし客一禮するならバこなたも愼んで一禮すべし臺引物ハ客の吸物椀のふたをとりてもり出すべしすべて給仕ハ座敷の敷居一ツへだてゝ次にあるべしされども客同輩よりハやはりその間の下座にあるべし　（をハり）

○縫ひ方いろ／＼

ちりめんハゆがみて縫がたきものありこゝに秘傳ありちりめんの端より糸を一筋ぬきとるべし其所まつすぐに筋あらはるゝなり此筋の通りを縫ふときハ少しもゆがむことなし又地にのり氣多き絹ハ縫ふうちにしわよるものなり加樣の物ハ手拭をぬらししぼり縫ふべき所に少ししめりとふくませて縫ふべし又地よハく薄く針目もれて糸目の利がたきものハ其色赤ならバ赤紙をよく／＼揉和らげ是を色帛にて縫ふべし何色にても其色の紙をよくもみ和らげて色帛にすべし又た下繪のありてがたきものゟ或ハ縫紋などをするにまん丸にても瓢箪ありにても紙にて其形をこしらへ此の紙形を縫ふべき所に當て眞中を針にてとめうごかぬやうにして此形の廻りを縫ときハ心やすくしかも手際よく出來るなり又た羅紗などの如き地の厚き物を縫つぐにハ縫ふべき両方の耳を削り薄くして縫べし縫あげて手ぎハよく絹糸ハ悪し麻糸にて縫ふべし

○娶の心得　（二）

娶最初ハ願ひの如くせバあれ又世界の娶ハ鑑となるべしそとじめ母親のいふやうハ女といふものハ一度嫁入してふたゝびかへればハ親の育て柄あしきによりさきの氣に入らずしてさられしといはれて親迄の恥辱となるべしさるによりてさきの夫を大切にし姑の氣に入るやうにすべし舅も男のことなれどいかやうにも

なるものぞといふとき娘答て御氣づかひなさるまじさとへいかやうのことありとも戻るまじ姑といふものはたとへ佛のやうな方にてももとは他人なり何事にも機嫌をとりて辛抱し申すべしと一旦母親に安堵さするは娘のならひなり時節來りて嫁入し當分はへやずみのことなれば愼み深きゆゑに家内のものまでもよきにいひそやすにより女心に油斷してなじむにまたがひ朝寐して髪ゆふに隙をとりめづらしきうちは夫も用捨するにつきあがりて姑の氣には入らず姑の顔付わしかれどそろ／＼姑を譏りいだし腰元下女を相手に陰口いへばそのうちにも又姑に告るものありて家内の騒動となる嫁姑の願ひには嫁入してさきの夫の氣に入り姑を大切にしていかやうのことありとも辛抱する願ひなりしを打わすれて夫の大切なる親をそしりわが口よりわが身を追出す媒をなすとなりうる　にしうとめをおやぞとおもひつかへなばいかでふたゝび家をいづべき

○ウイリヤム女の貞節　　奥山とく

ウイリヤム女は素と英國の産なるが幼にして父と共にアメリカ州デールフイルドに移り住み父はこの地の奉行職に擧げられたり時に千七百〇四年ウイリヤム七歳の春なりし事ありて父子もろとも土人の俘虜となりけるが暫らくありて土人は許多の償金を貪りて父ばかりは無難に放還したれどもウイリヤム女の性質怜悧よくして容貌の秀麗なるを愛し抑留めて還さず詮方なく憂き月日を其處に成長して後ち或る土人に嫁し其妻となれり是れより數年を經て或時ウイリヤム女は旅路の序に故郷の天の慕はれて故と住みなれしデールフイルドにたどり來り國人を尋訪ひて其身の轉末を告げしかば之を聞く人々はその數奇なるを憐みながらも且つ欣びつゝ說き勸るやら和女のこゝに來りしこそ天幸なれ今日より此地に留り再び

禽獸世界に拘しき土人の許に歸らざるころよけれと云へどウイリヤム女は更らに之を肯はず且つ答ふるやう妾幼にして不幸蠻人の俘虜となり終には其妻とありぬると豈に妾が心に滿足する所あらんや去りながら一旦同穴の契りを結び既に兒をも設けるるに我が身の不幸を憂ひつゝ夫子を棄てゝ此儘こゝに留るは婦たるの道にあらずかりしと言語強くも諸人に會釋しつゝ袂を拂つて土人の許に歸れりこれを見聞せるものはウイリヤム女の意中を推察られて各々涙に袖を濡さゞるはなかりしとぞ

○待賢門院堀川　　里見の花子

待賢門院堀川は神祇伯顯仲のむすめにて其頃ろ名高き歌人ありかつて傍輩の官女にしめす女敎訓の詞にいはく人はおのれを正しくして理にうとからねぞよしよこしまある道には人の思ひつくものなりおのれたゞしければよこしまにはまよひ侍らず　聞てゐきあからん事は大やう聞ぬがよきものなりきゝてよきものは琵琶琴和琴春のうぐひす秋の鹿の音と書けりまことに此詞つゞまやかにして理ふかしとぞ

○大貳三位

大貳三位は後一條院の御乳母にて紫式部の娘なり其詞にいはく世の人のよくわするゝものは第一我身第二に色このみ第三に忠孝の道第四にやまひ第五なまづしかりし時のと第六にうれしかりし時のと第七に物われにしたがはざる時のと第八によろづの情心第九に後生の道第十にわが年のよりたるなるべしといへり此ことばやすらかにうちきこへてしかも聖のをしへによくかなひ其意味深ければ代々の人も稱美せるなり

○小式部内侍

小式部十一歳のとき母のいづみ式部にぐして院の住吉まふでの御供したる千鳥かもめの波にあそぶと院

北面の侍ゐおほせ射させ玉ふに鳥立されざりけれど此鳥しきをよめと仰せとありける　千早ふる神のいがきにあらねども波のうへにも鳥居たつなり　君御感の餘り色の御けしを玉はり小式部の內侍と召れけるとなり

○婦人束髮會

婦人束髮會の主旨書と其規則は本誌二三の両號附錄として配布しさきバ我が讀者諸君は既に一讀せられ其趣旨のある所も了知せられしなるべし今茲ゐは同會より寄送せられたる束髮の雛形幷に說明書を掲載して御一覽に供んといふ

婦人束髮の雛形幷說明書

本會ゐ於て採用ゐたる婦人の束髮方ハ大略左の如し

西洋風　西洋上げ巻　同下げ巻

　伊吉利結び　まがれいと

日本風　をバこ　くしまき

　達摩返へし　とれつたむすび

　　俗に馬のしつぽと云ふ

　ひやうご結び　じやこ

右の中にて日本風ハ誰も皆な知るとなれど此にも唯西洋風の圖解を掲げて其結ひ方を說明す可し

西洋上げ巻

第一圖

右ハ前面を示すれ圖なり尤も前頭にて髪を分るハ本圖に示すが如く眞中にて分るり又ハ少く左右に由て

分るも可なり是れ銘々の好尙に由るとなり又バングと唱へて前頭の髪を一二寸許の間短かく截り込て額に垂るゝもよろし

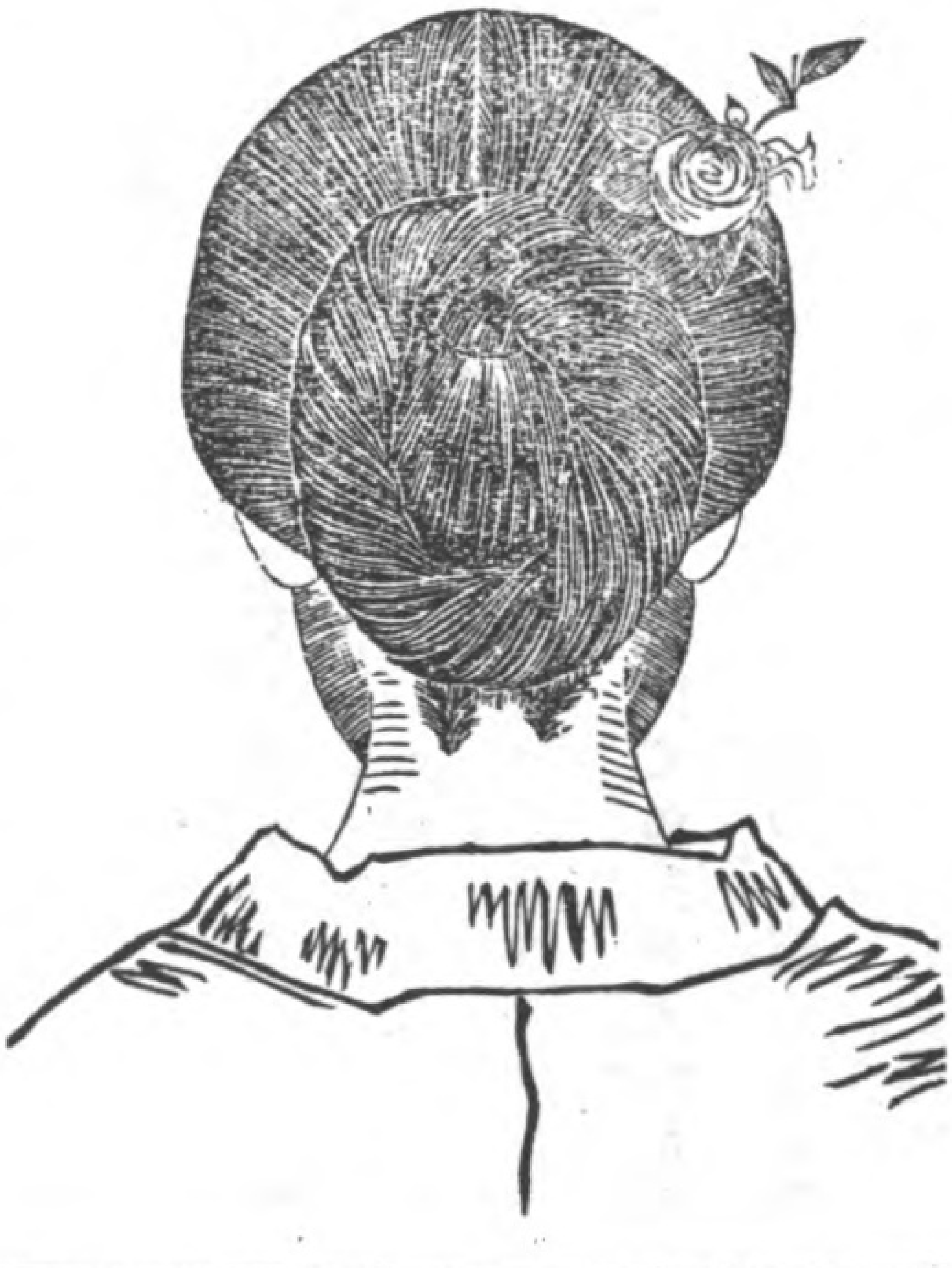
同上

第二圖

（結び方説明）先づ左の手にて髪の根を揃へ右の手にて其髪を三四回右の方へねぢり然る後ち適宜に圖の如き曲毛を頭上に作り毛先を根元へ押込みて所々を「ヘイア、ピン」（留め針の名なり）にて押へ留めて（圖中の黒點は留め針の跡なり）散亂せぬ様にするなり○此結び方は西洋に於て凡て中年以上の婦人間に行れるゝ者あり

西洋下げ卷

第三圖



此東髪方は唯髪を後頭に下て結ぶ迄にて別段上げ卷の結び方に異らざれば説明は之を畧す

○女の五ッ文字　（第二号のつゞき）

胎。

胎とは氏素性の正しきをいふ女の他家へ嫁し行

ハ武士の戰場へおもむくごとくしいかなるうきめにあるとも生て再びかへり父母の名をけがす事あるべからずとなり奥州安倍の則任が妻ハ夫降參して敵にひかれゆくを見て別をゝしみ君敵陣よいたらば定めて失なれ玉ふべしわれ武士の家ゐ生れ恥を見てながらへんよりよみぢに先だつべしと三才の子を抱き山の高根より岸に身を投て死す則任是れをきゝてそれも死なんことをねがへども敵もるさずせんかたなく石にかうべを討つけて死したりされバ女ハ操よて夫の名までよごさゞ右ゐいふを五ッもじの德そなわりし女といふ　ゑなひとのもとの心ハますかゞみみがのゝバおぼろくもりそつべき　（をしまい）

○ふとんのこと

ふとんハ蒲にて作りたる圓座なり今云ふとんよあらず今のふとんハ衾といふものなりといへり左にはあらずやそりふとんなり木綿のわたらざる以前ハ庶人の冬ハ衣服にハ布ゐ蒲芦ハ穗わたを入て着たりよつて布子の名ありふとんまた同じ蒲の穗を圍めて入る依てふとんの名あり古も貴人ハ蚕綿をもつてつくれりこれらの衾なるべし古きふすまなど讀しハこれなり（近代世事談）

○女中の帶

むかしハ奥方息女方等神社佛閣に參詣の節ハさげ髪あり供侍ハ上下を着し女中の帶ハ今織金入にて幅ハ三寸計り針紗歴元を右之通の帶にて長さハ七尺五寸なりし端女ハ木綿金入とて木綿にて金糸を入織たる帶を用ひ寛文のすゑよりよふ〳〵帶の巾廣くなり延寶の頃専ら巾廣くなり緞子三ッ割長さも壹丈程に成たり（古老物語）

●いろねの答（五）　いろハ家のことにて万葉東歌に家々にハといふをいろハ、よハとも讀めりさていろせ、いろと、いろねといふハ舎兄、舎弟の意にて同居同胞

を古ハ實の兄弟と云へり故に母をいろハとも云ふなり(栃木師範校渡邊へい)

●白無垢の答(六) 是れハ頭髪の白雪を頂くまで鴛鴦の契を渝へざるを証するものにして夫の爲に清貞を守る白無垢の潔白の如くせんとを明すなりと或書に見えたりき(越後竹田南枝) ●同上の答 攝陽群談に白無垢を着する禮式、白紋小袖、公卿以上、無紋練小袖、侍從以上、白小袖、諸大夫、とあり是れ慶長廿七年關白昭實公の議定する所なり蓋し儀式に用ふるより追く轉じて嫁入の時にも用ふるものになりしならん(西島楳所)

●おの字の問(十二) 婦人の名におまつおふけ抔稱するおの字ハ如何なる理なるや(崎玉後藤かめ)

●歯を染むる問(十三) 我國婦人の歯を染むる原因及び其の利害ハ如何(秋田戸村ひで女)

●風呂敷の問(十四) 風呂敷といふ意義を說示せよ(靜岡中村ます)

廣告

文學雜誌

月五日初号出版●壹册正價五錢郵税壹錢十册前金郵税共五拾六錢毎月貳回發行

弊堂女學雜誌第壹号へ廣告仕候文學雜誌ハ八月中に其初号を發刊可仕手順の處編輯上都合と事務都合に依り前記の通り期日を延し發行可仕候間續々前金よく御注文可被下候既よ是迄御申込よ候向は至急前金御拂被下度將又た見本御入用の六錢封入して御通知あらバ出來次第一冊御送付候此段廣告す

女學雜誌文學雜誌發行所
東京 芝區櫻川町八番地 萬春堂

今般校舎を擴げ來十五日授業相始新規入學を許す本校の目的ハ外國女教師四名本邦教師數名に頼り彼長を取我短を捨和漢英の學術ハ勿論諸禮裁縫割烹等に至る迄專ら注意して適世の教育を施すに在り入學志願者ハ十五日迄に申込あるべし

築地居留地
四十二番館

新榮女學校

詩文添削

詳細ハ本誌三号ニアリ

東京麻布谷町卅八番地 梅花吟廬

凌雪

薫梅園

一名日本全國新聞雜誌獨案内（郵券代用一割増）

九月廿日限り前金特別減價十四錢郵税四錢（郵税共）全一册金十八錢郵税四錢

本書ハ日本全國ニテ即今現ニ發行シ居ル所ノ二百有余種ノ諸新聞雜誌の題名、社名、社ノ所在地位、發刊ノ定期、定價前金、附錄ノ部各私立會發行ノ雜誌報告ノ獨案内等以上一ツモ漏ス所ナク詳細ニ網羅編纂ヒタルモノナレバ苟モ我國今日全國新聞ノ形勢ヲ知ラントスルモノ新聞雜誌事業ニ從事スルモノ新聞雜誌ヲ好讀スルモノ商工書舖賣藥業者ニシテ其ノ發賣品ヲ普ク全國ノ新聞雜誌ヘ廣告セントスルモノ等ハ必携閲覽スベキ要書ナリ

發兌所　大阪北區中之島二丁目廿六番地　進修館

婦女立志編

近藤賢三編纂

全編六册毎月一册發兌
一册豫約定價十五錢

中村敬宇先生の西國立志編一度び世に出でゝより天下に無數の英才を生ぜり何者か之と讀んで感奮せざるあらん然れども事大抵男子の上に係り其の婦女を敎ゆるの條甚だ少きを覺ゆるをのみ遺憾とす余多年此の思ありて暇ある毎に或ハ洋書を抜萃し或は漢籍を渉獵し我國在來の古書ハ略ぼ通讀して凡そ婦女立志の敎となるべき傳記説話ハ大抵集錄せり由て此度其の中の萃をとりて玆に婦女立志編なる者を出版せんとするに當り購讀者の便と謀りて豫約出版の方を立つ一册十五錢にして枚數ハ各册六十葉あり六ヶ月にして之を畢ヘ少か婦女改革の任を盡さんとす四方の姊妹中若し購讀の豫約を爲さんとならば希くハ十○○○○○月十五日迄に本部へ通報あれ

東京芝區西久保櫻川町八番地
女學雜誌發行所　萬春堂内
豫約出板部

女教員姓名録

日本全國公私立女學校

右は弊堂に於て近日編製仕度候に付各府縣の女子師範學校及公私立女學校幼稚園の名稱地名及敎員の姓名等詳細承知仕度就てハ乍御手數左の要目丈を至急御報道被下樣相願度此段奉御依賴候也但し出來の上ハ一部進呈可仕候

萬春堂　謹白

各府縣女子師範學校女學校幼稚園御中

○校名（園名）　○位置　何府縣何國何郡何町村何番地　○女敎員姓名　何府縣　何の誰　○助敎員姓名　同上　○女生徒　現數○○○名

發行所　東京芝區西ノ久保櫻川町八番地　萬春堂

持主兼印刷人　大庭宗吉
編輯人　近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町　巖々堂
同神田區雉子町　團々社
同日本橋區新葭町　良明堂
仝日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
仝京橋區木挽町一丁目　萬字堂
仝京橋區銀座二丁目　山口福松
仝牛込區白金町　活神堂
愛知縣名古屋本町二丁目　石版社
岐阜縣美濃國笹土居町　星菱書房
大坂北區中ノ島二丁目廿六番地　進修館

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY